

# カナダ——人と国土

北アメリカ大陸を地図で見ると、半開きの扇の形になっている。その逆三角形の上半部を東西に狐を描くように広がり、頭のところで北極までのびているのがカナダである。

カナダは総面積九九七万五千平方キロソ連（二千二四〇万平方キロ）につぐ、世界第二の広大な国である。わずかながら、中国や米国より広く、ヨーロッパ全体もカナダ一国に及ばない。日本の二七倍もあり、淡水面積だけでも日本の国土面積の二倍以上。東西五千キロ以上（東京—バンクーバー間が約七千二百キロ）もあって、全国が七つ——西部ユーコン、東部ユーコン、太平洋、山岳地帯、中央平原、東部地方、大西洋、ニューファウンドランド——の時間帯に区分され、その間に五時間半もの時差があるほど。

この国土の広大さは、人間居住に限り、ない可能性を擁しているかに見えるが、それ自身が重荷にもなっている。国土の大半は山岳地帯で岩だらけか、あるいは北極に位置する。開発された地域は総面積の三分の一に満たず、農耕地は八パーセント以下、全土の四三パーセントをおおう森林資源もその約六割しか開発されていない。



カナディアン・ロッキーの最高峰マウント・ロブソン

また全人口の約六割が米国との国境線とケベック市—セントメリー（スベリオル湖と、ヒューロン湖の中間にある）の千キロ内に集中している。この一帯にある八都市（モントリオール、トロント、ハミルトン、オタワ、ロンドン、ウインザー、ケベック市、キシユナー）だけで、全人口の三六パーセントを占める。一方、全国土の約九割近くには人間が恒久的に居住していない。人がフルに住みついているのはカナダ最小の州、プリンス・エドワード島（面積・五千七百平方キロ、人口・十一万二千人）ぐらいで、米国との国境沿いを除いて、住民は極端に稀薄で偏在している。ノースウエスト・テリトリーズ（北西準州）のときは、三二六万平方キロの面積に三万五千人ほどを数えるのみである。

こうした人口の過度の偏在は、カナダの気候と地理によるところが大きい。すなわち、首都オタワやケベック、モントリオール、トロントといった主要都市は、緯度の上から見てロンドンやベルリンよりはるかに南に位置し、五大湖近くは気候的に亜熱帯に近い、また太平洋岸のバ

ンクーバーあたりは、黒潮の影響で夏は涼しく、冬は暖かい。反面、ユーコン、北西準州の一部では、大古何度も押しよせた氷河がまだその痕跡をとどめ、その他の地域では岩石地帯であったり、土地がやせていたり、あるいは寒冷なため居住に適しないところが多い。

カナダは、全体的には、東をアパラチア山系、西をロッキー山脈に囲まれ、その間コルディアエラ山系、それに北をトーングト山脈やエレスミア山脈に囲まれ、その間に広大な低地、平原の内陸がアメリカまで続く、という単純な地形をなしている。

しかし、よく見ると、カナダの地勢はきわめて多様である。世界有数の大山岳地帯を形成し、カナダの八大森林地帯のうち五つを擁するコルディアエラ地帯（東北部を除くブリティッシュ・コロンビア州、ユーコン準州、北西準州の西部を含む）。ここは中世代末から第三紀にかけての激しい造山運動によって押し上げられた地帯で、天然ガス、石油、石炭、銅、亜鉛、錫、銀、モリブデン、水銀、ニッケル、アスベストなどの鉱床が発見されている。太平洋に面する一帯は、暖流の影響で気

サスカチュワンの農場



候は温暖、雨量も多く（地域によって異なるが、年間およそ二五〇ミリから二千六

百ミリ）、水産資源、地下資源、森林資源に富む。

メキシコ湾から北極海までのびる大平原の一部を形成する内陸平原地方（ニトバ、サスカチュワン、アルバータの諸州）は、カナダの大穀倉地帯であると同時に、石油、天然ガス、石炭などの豊庫でもある。西側のロッキー山脈によって太平洋からの温暖な空気が乾燥され、東側から吹き下ろす風が圧縮して熱するたため（チヌーク風と呼ばれる）、真冬でも気温が突然五〇度もハネ上がり、湿度も砂漠なみに下がることがある。



これをさらに東へ行くと、国家としてのカナダの発祥の地で、立地上、あるいは産業上、カナダの「心臓部」をなす、セント・ローレンス低地帯となる。五大湖とスペリオル湖から大西洋に至るセント・ローレンス水路をかかえるこの地域は、カナダ全土のわずか一パーセントにすぎないが、トロントとモントリオールの二大都市をひかえ、経済の中心地で国際貿易の要所。気候は良好で、水力も豊富。

この低地帯の北側には、カナディアン